
ツクリバナシ ～神隠シ～

KT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツクリバナシ ～神隠シ～

【Nコード】

N3747W

【作者名】

KT

【あらすじ】

「私」と、Vの、最後のお話。

オカルトを追いかけた一人の男の、最後のツクリバナシ。

短編集、ツクリバナシの最終話になります。

最後の話をしよう。友人であるVの、最後の話を。

大学四年の終わろうとしていた春、国家試験も終わって友人連中が旅行に出かける中。

私は神隠しに会った。

Vは神隠しに遭った。

そして翌年、実習の班分けの名簿に、Vの名前は無くなっていた。

「なあ、春、どこかに行かないか？」

誘ったのは、何も色っぽい理由があったわけではない。Vの様子が、どう見てもおかしかったからだ。

もともとおかしいことを私は知っていたが、それをVは他の同級生に隠して…入学当初の、開けっぴろげで社交的な人間という演技をして…続けていた。

だが、今は。

「……ん？い、いや、俺は、いいや。」

そんな様子も見られなくなっていた。

友人の旅行の誘いは、全部拒否。春休みは大事な用がある、とのこと、友人が私となにかあるのかと問いかけてきたほどだ。当然そんな約束はしていないし、Vが何をするとも聞いていない。

更に言えば、ここ数日のVは一心不乱に携帯を打ち続ける姿しか見ていない。指が霞むほどの速さで打ち続けるそれは、一体何の目的で何をしているのか、不気味以外の何者でもなかった。

「なんだ。何かあるのか？」

「……別に。お前には、関係無い。」

今にして思えばこれだって、いつものVらしくないと言えはらしくない言いぶりだった。だが、私はバカで、共に過ごすようになって一年近く経つにも関わらず変わらぬ短気だった。

「関係無いとは何だ、関係無いとは！折角誘ってやっているんだ、その言い方はないだろう！」

「……事実だ。」

「携帯を弄るのをやめろ！」

なおも打ち続ける携帯を、私は力ずくで取り上げた。力ははつきり言っただけで私の方が上だ。Vがさして抵抗もせずあっさりと手放したそれは、打ち込んだ画面のままだった。それを無表情に見つめて、黙ったままだった。

「……返せ、くらい言わないのか。」

「言っただけ聞かないなら。」

「……なぜ、だ。春に、何かあるんだ。」

また、Vは黙った。言っただけ聞かないなら。なるほどその通りだ、こいつは教える気が無いなら言っても聞かないだろう。言うだけ無駄、というわけだ。私に出来るのは、やれやれと首を振るだけだった。手に持った携帯電話をちらりと一瞥して放る。

「……ほら。」

Vは無表情にそれを受け取り、じっとこちらを見た。ばれたか、と胸の鼓動が早まるが、それを誤魔化して自分の席に戻る。「ならもう用はない」のセリフは、若干不自然だったか。いつもはVにばれようが特に気にしないが、今回はそうも言えない気がする。

何か分らない、いつものオカルトを探知する『悪寒』ではない、単純な勘。

だが、その勘も、私は大分当てにしている。外れたことは殆ど無いのだから、当然だ。

Vの視線がまた携帯に戻ったのを確認して、私も携帯を開く。こつ見えて、瞬間記憶には少々自信がある。先程見た、Vの携帯に打たれていた文面のワードを片端から打ち込んでいく。

（…検索すれば、どこに打ち込んでいたのかくらいは分かるかも知れない。）

記憶に残ったワードを、組み合わせを変えながら、ある時は文章を単語に切り分けながら検索していく。引っかけたのは、幾つかの掲示板。大規模でいくつもの話題が並列しているものや、18禁と書かれた掲示板、中には中学生の学校などの荒れた掲示板にさりげなく入り込んでいるものもあった。そんな中でも、数が多かったのは。

（……オカルト掲示板、か…。）

あの男。

内心で苛立ちが募るが、何とか口には出さない。口には出さない

が、苛ついているのは確かだ。あの男、前の一件である程度私に敬意を払うようになったと思っていたが、まだ私にオカルトの事を隠そうとしているのか。

恨みを込めて、Vを見る。

その視線の先でVは、また一心不乱に携帯を打ち込んでいた。

この時、私は完全に見落としていた。オカルト絡みというところまで辿り着いただけで満足し、その掲示板達に書き込まれていた内容を吟味していなかった。怪異の筆頭たる『都市伝説』、それを生み出す「噂」の最先端である掲示板であるということも失念していた。

そして、もうひとつ。

なんとなく意味を知っていたせいで、深く考えもせず検索していた、そのワード。

『神隠し』の言葉の意味を。

春休み、私は結局友人の誘いを断って一人ですごしていた。座っているのは、大学図書館の中の、パソコンの前。そして横のデスクには、同じく構内に置かれている地方新聞。

片端から取り寄せたその情報をむさぼるように読み漁るのは、嫌な予感が絶えないからだ。何か、頭の中で警鐘が鳴り続けるかのように、急かされている。その中心に、Vがいるのを感じる。冬の一件と同じような、それでいて何かが決定的に異なる様な。

「おいおい…。」

驚いた。この小さな町で、既に二人もの失踪者が出ていた。新聞では単なる学生と書かれているが、ネットで見ればいずれも少々難しいところのある学生だったようだ。いずれも捜査願いが出されていて、警察もある程度動いているらしい。

「だがな…。」

当然それを字面通り捉える程、私は楽観主義者ではない。既に目に見える形で失踪者が出ているのに、失踪者総数がそれと同じはずがない。少なくとも倍、悪ければもっと多くの失踪者が出ていることだろう。事実、掲示板に「あいつ帰ってこないね」等の発言が幾つかみられた。

「『神隠し』、か…。」

掲示板に共通するのは、その言葉。

恐らく『都市伝説』が生まれる前から存在するであろう、太古の『都市伝説』。その仕組みやら説明は多岐にわたり、デマや人為的なものだった、というものも多いが、少なからぬケースで、「本物」がみられる怪異。当然、私がその詳細な仕組みを知っているはずがない。

とにかく、何かが私の知らないところで起こっている。それで十

分だ。

そしてVは、それと何か関わっている。そこまで来れば十二分だ。

「…問い詰める。」

半日以上かかった調査を打ち切って、私は大学の駐車場へと向かう。これだけそろえば、もうVも逃げないだろう。更に言えば、二人しかいない状況で詰めよれば、恐らくあの男ならすぐ折れるはず。

この時、私は甘く見ていた。

『神隠し』など、大したことはない。

一年前、Vと、オカルトと出会って以来無数にこなしてきた、『怪異』の事件の一つに過ぎないと。

罰当たりなこととした。よく解らないまま振り回されてもいた。危険なことなど、そうでないことの方が少なかった。死ぬ、思ったのも、一度や二度ではない。

だから。

これが、Vとの別れになる、最後の話だとは、私はこの時はまだ、全く考えていなかった。

翌日、私はVの家に向かった。
時刻は、昼過ぎごろだったか。

久しぶりに訪れる家に、Vはいなかった。
Vだけではない。

(……背筋の『悪寒』が、無い。)

何も、いなかったのだ。

以前Vの家に行った時は、無数の、数えきれないほど多数の「人ではないもの」がいたのだ。それこそ、背筋に走る『悪寒』が、とどまる暇もないほどに。私の『悪寒』は、人外をかなりの精度で捉える。そのセンサーが、全く反応しない。

家の力ギは、かかっていたいなかった。入ることを少し躊躇いはしたものの、私は物怖じしないのを長所と思っている。一瞬の逡巡のうち、私はドアを開けて、ズカズカと上がり込んだ。

入って、辺りを見回し、絶句した。

道具が、無かった。戸棚に並べてあった数々のストラップも、銀色で神秘的に輝いていたナイフも、愛おしげに眺めた何かの取りついた人形も、壁にいると言われていた巨大な蜘蛛の化け物も。もともとあったVの私物の中に紛れ込ませてあった、オカルト絡みの、曰く付きのモノたちがすっぽりと無くなっていた。

これが、神隠し、なのか？

神隠しは、人を隠すものだ。その人の家のものまで隠してしまうものではない。

Vがもし神隠し遭ったとして、なぜ家のものまで無くなっている？

明らかにもつとまずい事態になっていることは、一目瞭然だった。

狼狽して周囲を覗く私の目に、パソコンが目に入った。

手掛かり。そうだ、Vが打っていた文章はかなりの長文だった。

掲示板へと書き込むだけなら、パソコンで打ち込む方がはるかに容易だ。一日中複数の掲示板を監視していたのなら、これも使っているはず。

（……Vが馬鹿で良かった。）

本気でそう思った。或いは、ここまで探しに来るとは流石に想像していなかったのか。そのパソコンには、しっかりとVの見ていた掲示板の履歴が残っていた。全ての掲示板に、「テスト」と書いて打ち込む。出たIDを検索すると、いくつもの書き込みが出てくる。

「……っ。」

そこで、私は気付いた。

Vが、神隠しに遭ったのではないことに。

いや。

寧ろ、真逆だった。

「あの男…っ。」

私はすぐさま車へと向かった。

Vの居るであろう場所へ向かうため。

車から降りた私は、もう春が近いとは思えない肌を刺すような寒さの中、冬の名残の落ち葉の積もる道を駆け上った。県のちょうど真ん中に位置する、高さだけなら千メートル程度の山の、登山道。だいぶ人の手が加わっているせいで知名度は低いが、知る人ぞ知る、『霊峰』だ。

当然、奴が知らないはずはない。

五合目まで車で登り、すぐに暗くなるだろう山道を、そこから目的の片足の鳥居へと走る。

登山道进行、
別れ道进行、
やがて消えゆく獣道を駆ける。

どのくらい走ったか。
山道を走るにも関わらず、私が疲労や息切れを意識することはなかった。

夕暮れが、視界の向こうに見えた。

ゾクリ。

そこに、Vはいた。
夜の暗さの中、幽霊…本当の幽霊のように、鳥居のもう一本の足のあるべき場所に立っていた。
そこで初めて、私は激しい動悸を感じた。一気に汗が吹き出し、息が荒くなった。

そんな私をどう思ったのか、Vはこちらを見やって言った。

「……来ないんじゃないかと、思っていた。」

その言葉は、いつもの…、いや、いつもよりも更に、厳か、神聖に、聞こえた。

「……来たとしても、会う…いや、遭うことは、無いと思っていた。」

「…なんのことだ。それよりも、お前は、一体、何をしているんだ。」

「人殺しさ。」

断言したVに、私の喉がゴクリと鳴った。その音が、やけに大きく響いた。相対するVにまで聞こえるのではないかと思うほどに、意識に深く聞こえた。Vの顔からは、全ての色と感情が抜け落ちていた。

「…何を。何を、何を、」

「知っているんだろ？俺がやった。俺が、この手でやった。俺が、『神隠し』だ。」

Vの体が、動く。それが、出来の悪い人形劇のように、スローモーションで目に映る。

首がゆっくりと持ち上がり、毒々しい赤に染まる空を見る。右手が掲げられ、視線の先に翳される。

そのまま、夢遊病者のように数歩、ふらふらと歩く。

ほんの一瞬の停止の後、上がった手がゆっくりと下がって、塗装の剥がれた柱に触れる。

その動作に何の意味があつたのかは分からない。だが、その一連の動作が終わった後Vは幾許か人間らしい表情を取り戻して、力無く笑った。いつもの唇の端を吊り上げる嫌味な笑みではない、目がトロリと溶けたような、脱力した笑み。

「…出来ると、思った。いや、出来るんだ。お前も見たんだろ？『登山道から外れた中腹の片足鳥居の下で、夕暮れ時に願うと、自分の望む異世界へと行ける』。俺が流した…いや、創った噂だ。まだまだ虚弱だが、『都市伝説』となりつつある。」

Vは喋りながらも、愛おしそうに片足の鳥居を撫でる。

ゾクリ。

「大変だったさ。本来は『幽霊』やら『悪魔』やら、土台となるものがあつてこそ噂が流行り、『都市伝説』に昇華するモンだ。それを、何の下地も無く『都市伝説』を作ろうとしてんだから。まあ、もう大丈夫だろう。やっと、成功したから。」

「…何をしたんだ、お前はっ！」

思つた以上に大きな声が出た。

それは、背筋に走る『悪寒』のせいかな。或いは、それを掻き消そうとしてか。

Vは左手で、無造作に足元を指差した。

「分からないさ。どうなったか、俺は知らない。コレがどうなったか、俺は知らない。」

[illegible]

世界が、一気に揺らいだ。背筋の『悪寒』が鼓膜まで震わせ、三半器官まで狂わせてしまったかのような耳鳴りと眩暈。視界まで異常となり果てて、夕暮れのはずの世界が不自然な……不気味な紫色に染まっておいた。その中で、私は見た。一人の男が、うつぶせに倒れ伏せている。片足の鳥居が、まるで墓標であるかのように。

「どこに行つたのかなあ。こいつは。体が残つてゐるんだから『幽霊』の世界かなあ。それとも単純に『死後の世界』に行きたかつたのかなあ。ハハハ。……俺はまず、人で無いものを殺し続けた。まあ、結構な貴重品もいろいろと使つたがな。それで、「怪異が消える」というものを下地に『神隠し』を作ろうと思つたんだが、どうにもうまくいかなかつた。……だから、噂を流した。なあに、ここに来る奴の大半は自殺志願者だつたから、それを叶えて「噂の下地」を作るのは簡単だつた。」

「いつからか、体に違和感を感じた。これが多分、俺自身が、『都市伝説』になった、ってことなんだろうな。それがとうとう、力を発揮した。まあ、コレの靈感の強さのせいかもしれないが、な。はははははは。」

「あとは、もう最後の仕上げだ。『神隠し』が一人立ちしたら、俺がそれに願う。…それで、終わりだ。俺が、この世界からサヨナ

[illegible]

Vの笑いは、奇妙だった。高笑いのようなボリウムは無く、それでも異様な存在感を放つ嗤い。泣いているような、縋りつくような笑い声。

私は一瞬、固まってしまった。

止めるべきだった。殴ってでも、骨の数本へし折ってでも止めるべきだった。

けれども、Vの蒼白な顔を見ては、私の反応も鈍っていた。

「Vっ、お、お前、おまえ……っ！！！！」

「俺の『靈感』なら、『神隠し』に遭うのは難しくないだろう……計画の最後の関門が、お前だった。お前の持っているそれを、今使われる訳にはいかないんだ。」

Vの左手が、弾けるように持ちあがった。

立てた人差し指が指差すのは、私の上着の右胸。

指差されて初めて思い出した。私が肌身離さず持っていた、『菩提樹の数珠』。私が持つもう一つの、いわゆる「呪いの品」を相殺するためのもの。『靈感』を封じるそれなら、Vの『神隠し』を封じることが、出来るかもしれない。

気付いた私の動きは速かった。

一気に近づいて、それでVを縛るべく駆け寄る。

だが、そんな私より、Vのほうが素早かった。突然投げつけられた何かを、私は右手ではたき落とす。その数、五つ。その五つ目を打った時、右手に激痛が走った。一瞬止まった足に、狙いすました

ように飛んできたナイフが掠った。痛み立っていらなくなり、その場に跪く。

掠っただけなのに、そのまま急速に意識が遠のいていく。

「……っ、な、何、何を……っ。」

「五つ目が……。やっぱりお前は、すごいよ。『靈感』の無さは、天才的だよ。」

そのまま倒れた私の耳に、Vの声が響く。

目が、Vの靴を鼻先に見る。

Vが、私のポケットを漁る。

それは、私の最後の希望の数珠が入ったポケット、では……ない。

奪い取られたのは、反対のポケットに入った、「呪いの品」……『ダブルペンタグラム』
二重五芒星のストラップ』だった。『靈感』を異常に高める……言い換えれば、怪異を呼び寄せるその呪われた逸品。

そして、うつ伏せに倒れた私の背に、何かが載せられる。

瞬間、私の右胸で、パン、という軽い音がした。数珠の紐がきれたのか。

私は一気に体の……いや、心の力が抜けた。

Vを留められる最後の手段を失った時、私は失神してしまった。

不思議と、『悪寒』は感じなかった。

心地よいまどろみに落ちていくなか、私は何か、別れの言葉を聞いた気がした。

目が覚めた時、そこには誰もいなかった。私の体には、Vが着ていた真つ黒のライダージャケットが掛けられていた。だが、そこにはもう私以外の温かさはなかった。辺りを見回しても、人影は見えない。倒れていた見知らぬ男も、……Vも。

じゃらり。

ついた手のひらに、整った球体を感じた。拾い上げたそれは、数珠の珠の一つだった。ポケットに入っていたそれはやはり千切れていて、無数の珠が地べたに散らばっていた。それをみて、私はやっ自分はどうしてここにいたか、何をしようとしていたか、そして今、何をすべきかを思い出した。

ゾクリ。

私は黙々と数珠を拾い上げた。時間感覚が麻痺した中、百八の数珠を拾い上げ、数えた。無造作に放り投げたままになっていた、Vの持っていたボールも、無機質な輝きを放つナイフも、私は拾い上げた。靄のかかったように鈍った意識の中で、百八の数珠を、もとの紐に丁寧に通した。

ゆっくりと立ちあがる。

ふと気付いたが、倒れた時にはあれほど傷んだ右手も、足も、殆ど痛まなかった。

夢かも、とさえ思ったが、見下ろすと長ズボンにはしっかりとナイフの傷があり、その下に赤い線が見えた。

気を取り直して、歩き出す。

ゾクリ。

朝の光の中で、静かに佇んでいる、片足の鳥居の元へ。

両端をしっかりと握っていたその数珠を、私はそのまま鳥居の柱に結び付けた。

……終わった。

背筋の『悪寒』が、止まった。

『神隠し』は、これでもう起きないだろう。

私はぼんやりとした頭で、登る朝日を見つめ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3747w/>

ツクリバナシ ～神隠シ～

2011年10月9日16時07分発行